

# Alternative Systems Study Bulletin

第10巻第6号

(2003年2月15日)

---

「新しい思考」を求めて

心理学ノート（その2）

A. ワロンの身体論

B. ワロンの社会論

C. ギブソンの『生態学的視覚論』（上）

後 記

---

編 集 境 毅

連絡先 〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169 号 貿易研究会

ホームページ <http://homepage1.nifty.com/office-ebara/>

メール [kyw04500@nifty.ne.jp](mailto:kyw04500@nifty.ne.jp)

会 費 正 会 員 : 年間 1口 10万円

賛助会員 : 年間 1口 3万円

購読会員 : 年間 1口 1万円

振込先 口座名 : 資本論研究会

(郵便振替) 口座番号 : 01090-5-67283

### 哲学は一人一説

唯物論という哲学のことでしょうか。私は最近、人はすべて哲学者として生を受け、哲学は一人一説の世界であると考えようになりました。もちろん哲学好きになったり、職業的哲学者になる人はごく一部の人たちですが、人が言葉を理解し、従って思考しているという限りにおいて、人は哲学者であり、そして、その哲学は千差万別と考える他はありません。

このように考えれば、個々人の千差万別の哲学を超えたところに、学問としての哲学が普遍的なものとしてある、ということは想定しにくく、唯物論というものがこのような普遍的なポジションにある、ということは主張できないように思います。

○ 哲学といえはすべての人たちの思考のトータルなのだ、というように考えるなら、そこに共通なものを求めるとすれば、思考方法といった領域のものに限られるように思います。それも、普通論理学と呼ばれているような思考の対象を捨象した静的なものではなくて、思考する人と思考の対象を含んだ、ダイナミックなものでしょう。私はこれをエンデに倣って「新しい思考」と呼んでいます。

### 「新しい思考」への歩み

私が「新しい思考」に気付くきっかけは、80年代後半に、マルクスの価値形態論とヘーゲルの意識論に興味をもち通説とは別の捉え方を知ったことにありました。

価値形態論では思考による抽象作用に基づく抽象的人間労働という概念とは別に、商品の価値関係において、分析ではなく、関係づけられること（総合されること）で抽象的人間労働が現出するということが語られています。ここでは思惟抽象と事態抽象とが、一方は思考での分析によるのに他方は、事物の関係、つまり総合によっていることが述べられていたのです。このことがわかると、思考は対象を分析することによってしか抽象できないが、現実には対象が総合されることによって抽象されているとすれば、分析的思考とは別の思考が要請されることになります。

次にヘーゲルの意識論は、意識一般を自我と対象との関係と見、自我と対象との同一性を、それらが意識の内に取り込まれていることがわかりました。

○ 意識を自我と対象との関係として捉えると、意識自体が内的矛盾をもったダイナミックに運動するものとして措定することが可能になります。

後になってわかったことも含めてまとめてみますと、ヘーゲルの場合は、関係の両極をなす自我と対象とを双方が意識の契機であるという点で同一性を認め、ここに主客の合一による新たな真の実体としてある意識を主体として捉えることで論理学の体系を構築しえたのでした。

ところが、ヘーゲルの弁証法は同時代人のゲーテが批判するように、現実の個別的なものの外から強引に与えられた普遍的な枠組みであり、絶えず現実を取り入れようと努力してはいるのですが、弁証法の外在性そのものは救いようがありません。そこで自我と対象という両極は、絶対的他者としてあり、自我が意識を働かす、という意識関係のうちのみ双方の同一性が成立しているにすぎない、と考えると、ヘーゲルの弁証法の転倒が可能となってきます。

この見地から、マルクスが価値形態論で展開している、等価形態におかれている商品が、その自然形態のままに価値の化身とされる、という形態規定の論理を捉え返すと、両極の間系で、関係させられる方の極が、その自然的な質料そのまま、その関係の内実である一般的なものの化身とされることがわかります。そして、これを自我と対象との間の意識関係に適用してみますと、自我は対象との

間に意識を働かせることで、対象をその自然的質料のまま、意識の化身としていることがわかり、ヘーゲル弁証法はこの事態に困惑されて成立していることがわかります。だから、ヘーゲル弁証法を転倒する、ということは、関係を把握する論理としての形態規定の論理を新たに打ち立てることに他なりません。

## エンデに学んだこと

さて次に「新しい思考」という言葉を教わったエンデに言及しておきましょう。エンデは主体と客体を区分し、主体が客体を認識するとする近代的科学知の枠組みを批判し、「新しい思考」の必要性を強調しているのですが、その観点は芸術知を応用しようとするものでした。芸術にあつては対象としての芸術作品とそれを意識する人との間に生き生きとした合一の関係がある、というのです。エンデがニュートンの光学とゲーテの色彩論とを対比して論じていることに興味をもち、ゲーテの哲学的思考を知ろうとしているうちに、カントからヘーゲルにいたるドイツ観念論の検討を強いられることになり、そしてこの作業はヘーゲル弁証法の転倒で一応終息をみたのですが、そのあと見えてきたのは、「新しい思考」の萌芽がいろいろな分野であったのだ、ということでした。

## 「新しい思考」の今後

「新しい思考」とは何かを一言で言えば、人間の社会関係を解明しうる関係についての論理ということになるでしょう。私はそれはヘーゲルの弁証法を転倒したところにマルクスが見出した形態規定の論理だと考えているのですが、関係のうちに置かれた個物が個物のままで類的なもの、一般的なものの化身とされる（ただしその関係のうちでのみ）という事態については過去にも多くの人たちが気付いていたのです。

例えばアダム・スミスの道徳論における人間観や、それを継承した G・H・ミードの自我論は自我が自身と一般的他者との社会的な二重物であることを説いているし、また、ギブソンのアフォーダンスは、対象そのものが人間との関係で形態規定されることを指しているように思われます。また最近の例で言えば、内部観測も、事態抽象と形態規定の認識にせまる試みであるように思われます。

恐らく 21 世紀は、このように萌芽的に現われている「新しい思考」を思考方法としてまとめていく世紀になるでしょう。

私は最近、商品経済が生活のあらゆる領域に浸透することで、個々人が従来あつた人間的な社会関係から切り離され、その結果自らを神格化せざるをえなくなっているという見立てをするようになりました。ルネッサンス以降の近代は、中世の神から人間を解放したのですが、その時は個人の解放でした。いま解放された個人が自己神格化を強制され、無力な神になってしまっています。人間の社会関係を説き明かす「新しい思考」は、神となってしまった個人が再び人間性に目覚めていくのに役立つでしょう。というのも自己の哲学者としての本来的な素養に目覚めることは、実は人間性の再建以外の何ものでもないからです。

## 唯物論は思考の一契機

ヘーゲルの意識論からすれば、観念論も唯物論も弁証法的に運動する思考の一契機でした。双方とも思考方法としては一面的だったのではないのでしょうか。ソ連型の「弁証法的唯物論」と「史的唯物論」は思考方法としては役立たず、むしろ教条の押しつけに一役買ったように思います。

この事態を反省しようとするなら、意識を自我と対象との関係と捉えるヘーゲルの視点に立ちかえり、そして両極の関係としてある意識をヘーゲルのように実体化、主体化するのではなく、関係が形態規定によって極にある自然質料をそのまま一般的、社会的なものの化身としている、という事態

を読み解く「新しい思考」を実践するしかないと私は考えています。

## <文献紹介>

思想界の定説とは全然異なる立場を述べましたが、ページ数の関係で論証や説明は控えざるを得ませんでした。詳しく知りたい方は、<http://homepage1.nifty.com/office-ebara/> の「哲学の旅」や「現場から」を参照して下さい。

## 心理学ノート (その2) //////////////////////////////////////

### A. ワロンの身体論

#### 1) 身体と情動

ワロンの『児童における性格の起源』の第 1 部 情動論はすでに紹介したように、非常にすっきりした説が述べられているが、第 2 部 身体論と、第 3 部 自我論にはあまりまとまりがないように思われる。また大著『子供の思考の起源』上・中・下 (明治図書) の各部の末尾に出てくる結論と注解を読んでみても素材だけが並んでいる、という感じで、論旨を読み取りにくい。それで、情動論の紹介だけにとどめておこうと考えていたのだが、論文集の『身体・自我・社会』(ミネルヴァ書房) の身体論は、すっきりとまとめられていることが解った。それで、この本に即して、ワロンの身体論を紹介しておこう。

すでに前に紹介した情動論で、ワロンは情動を非言語的コミュニケーションと捉え、人類史的には、言語を形成していく以前の社会におけるコミュニケーションとみなしており、そして新生児は生まれ落ちた時から、情動によるコミュニケーションを行っていて、この情動が自動活動を土台とした知覚を生成していく媒介となっていることを示していたが、身体論では、知覚や言語的コミュニケーションがすでに成立している大人の社会での情動の役割を考察している。

「昔と同じように今日でも、また日常生活そのもののなかでも、非言語的な人間関係はしつ

かり機能しているのです。それは共感と反感、相互理解と反目、不信と信頼などの《本能的》な感情を人から人へと伝えます。これを人びとは《直観》と呼びます。しかし、実際には、意識下でのサインの交換なのです。つまり、意識は行動選択の結果としてあらわれた結論しか知りません。このサインは単なる姿勢、時には非常に微妙な姿勢であつて、それが顔や手やからだ全体の表情の変化としてあらわれるのです。」(『身体・自我・社会』133~4頁)

これはひょっとしてレヴィナスの「顔」のことかも知れない。しかしレヴィナスのように、「顔」から「汝殺すなかれ」というメッセージを読み取り、論理以前の倫理的関係の本源性を説くよりも、ワロンの情動によるコミュニケーション論の方が豊かなように思われる。ワロンは、この情動がこれまできちんと評価されてこなかった理由について、次のように述べている。

「情動は二種類の神経中枢のあいだで動きます。ひとつは脳の中心部 (下位脳) にある植物性機能のための中枢であり、もうひとつは大脳半球の前頭領野です。人間では前頭葉が著しく発達しており、これが人間を他の動物から区別する基本的特徴のひとつになっています。情動は、状況に応じて二つの極のどちらか一方に片寄ります。しかしこの二つの極が拮抗しあうことによって、とくに心理的に高度に発達した個人においては、情動の性格があいまいになることもあります。そのため、ある人は情動を必要



不可欠な活動と考え、またある人はうまく適応できないときの混乱した反応だとみなしてきたのです。」(134~5頁)

ワロンは思考や情動を、生理的な働きに還元するわけではないが、しかし、それらと関連する器官の生理的な活動に注目している。そして情動にかかわる神経中枢が下位脳と前頭葉との双方を極として、そのあいだに働いていることから、意識と情動との拮抗関係を導き、このことが意識を中心においてしまうインテリゲンチヤが情動についてきちんと捉えられない根拠にしている。そして、本来の意味での運動と、姿勢の基盤をなしている緊張活動とは分かれているので、情動が有効な反応となって外界へと向かわず、なんらかの姿勢をもたらすだけで終わることがあると指摘している。そして、この姿勢で終わってしまう、ということが、人間の情動の特徴だと見ている。

「人間における情動の働きは、ふつうそのようなものです。しかし、これは活動の退化ではなく、新しい形の適応であり、さらに最後には意識という形の適応が導かれるのです。はじめは粗野な情動放出であったものが、姿勢による表現システムへと変化し、その姿勢が次第に分化し精妙になっていきます。動物の段階でも、すでに種によっては個体の恐怖や攻撃性が一種の情動感染によって、すなわち姿勢の擬態をとおして、周りの個体に伝播していくものがあります。この情動感染のうえに群れの集団が成り立っているのです。個体の姿勢が群れ全体の姿勢となり、この共有性のおかげで、さらにいっそう重みを加えて各個体にのしかかってきます。その姿勢は、一方で、それに対応する場合が存在することを必然的に意味します。こうして姿勢は意識の最初の支えとなるのです。漠然と体験された現実の場面であれ、他からほめかされたいわば想像上の場面であれ、いずれにせよその場面を意識化するのに姿勢が役立つのです。」(135~6頁)

ワロンは人間の情動表現が、姿勢の段階で止められることを適応と捉え、姿勢がもたらす表情が人間にあっては非常に発達していると見て

いる。そして、この表情をともなった姿勢によって、集団の中でのコミュニケーションが成立しているとしたら、姿勢は意識を交換しあう媒介物となっていて、この意味で、ワロンは姿勢を意識の支えとみなした。そして、情動が人間にあってはこのように進化したことで、それは明らかに下位脳の限界を超えて、前頭葉とも結びつくようになったとワロンは述べている。

「こうして情動が、生物学的存在に根ざしたより基底的なものをおして、個人を社会にしっかりと結びつけています。場面や事物についてのイメージが知性化されていくにつれて器質的な情動反応がしだいに影をひそめるとしても、個人と社会の結びつきが漸たれることはけっしてありません。意識のなかで、器質的印象と知的イメージとは対立しあいながら、同時に連携しあっています。両者のあいだでは、相互の作用と反作用がたえず続けられているのです。さまざまな哲学体系が物質と思维、実存と知性、肉体と精神とのあいだに設けようとしてきた区別がいかにむなしきものであるかを、このことは示しています。」(136-7頁)

ワロンはこのように述べて、物質と思维、実存と知性、肉体と精神との間の相互の作用と反作用に注目し、従来の哲学的知をむなしきものとして退けている。ではこの相互の作用と反作用とは、具体的にはどのようなものだろうか。ワロンは次の論文「情意的関係——情動について」でこの点の解明を試みている。

## 2) 姿勢と情動

ワロンは『身体・自我・社会』の第二部、6. 情意的関係——情動について、の前半では、情動について説明している。情動についてはすでに見てきたので、この論文の後半部分「心的生活における情動の役割」で述べられている、肉体と精神との間の相互の作用と反作用の分析に注目しよう。ワロンはここで「姿勢と表象」「情動の機能的価値」「精神説と末梢説の欠陥」「態度(姿勢)の同一性と意識の統一性」「社会生活における情動の役割」「知的生活との関係」「弁証法的矛盾と心的現象」という7つの小

項目をたてて論を進めている。まず、最初の3項目の内容を追ってみよう。

「姿勢と表象」でワロンは、表象の形成における姿勢の役割について考察している。もちろん表象を姿勢(態度)の単なる結果と考えることはできないが、しかし、表象が諸感官から受けとった印象の単なる写しだということもつとありえない。表象の形成には一定の文明状態や社会生活を前提とする言語などの観念や機能が働いて、表象に枠組みを与えているが、これの枠組は、つねに働いているので、その存在すらが忘れがちである、と指摘したうえで、ワロンは次のように述べている。

「たとえば子どもが物を知覚する場合でも、その物がもたらす刺激の質だけでなく、子どものそのときの欲求や状態に応じて、子どものなかにはある姿勢(態度)が惹起されるのであって、子どもの物の知覚は、最初まずこうした姿勢(態度)によっているのだと言えなくはありません。つまり子どもは、まず自分自身の姿勢(態度)をどうして外の現実を意識するのです。それにおとなでも、ある場面を心のなかで思い浮かべようとするれば、しばしばある一定の姿勢(態度)をとりつづけねばなりません。そうすることによって、私たちは外の現実をはっきり意識することができますし、また同時に自分自身をも意識することができるのです。この種のイメージのなかには、おそらく多量の情意性が入り込んでいます。しかし、まさにそれによってこそイメージが心的生活のなかに根をおろし、単純な自動作用の回路にイメージの回路が附加されるのです。」(171頁)

ワロンは子どもの知覚の仕方を例に上げて、表象を形成していくときの姿勢の役割を強調している。この考えはハンセンの「観察の理論負荷性」という考えと類似しているが、違いは、ハンセンが枠組を明らかに知的認識にとどめているのに対して、ワロンは「情動は人の行為のなかに意識のもろもろのモチーフを持ち込むもの」(171頁)と捉えることで、より広い心的生活を考えようとしていることにある。そして、ワロンは情動が表現的であることに注目する。

だから、これを自然と人間との関係的生活という見地から見ようとすると、その役割を見失うとし、表現ということがもつ社会性について明らかにしようとしている。

「情動が逆型的で感情表出的な価値をもってはいることは間違いありません。……表現とは、原初的には、その固有の傾性にそって生体を型どることで、それは本質的に言って自己塑型的活動であり、姿勢機能から生じてくるものです。実はこの姿勢機能は最近まで無視されてきました。情動は、この姿勢機能の心的表現であり、また姿勢機能から意識の諸印象を引出してくるものなのです。」(172頁)

ワロンのここでの提起は、非常に重要な問題を提出している。先に情動論を検討したときの印象は、情動の役割が自動運動から知覚が生じる時期の媒介として述べられていたことで、知覚の支配が優勢になると、情動の役割はなくなってしまふ、といったものだった。しかし、ここでワロンは、知覚の支配が優勢になっている大人の心的生活にあっても、情動の表象形成に果す役割は大きいと述べているのである。

## 3) 今日社会での情動の役割

情動の表象形成に果す大きな役割について、ワロンは、情動が表現機能であることを明らかにした上で、この表現が伝染性をもつことで、それが意味を伝達するところに求めている。「情動の機能的価値」でワロンは次のように述べている。

「自動作用の多様性は、そっくり環境の多様性に対応するものだと考えられますが、情動は、その多様性に情意反応の多様性を加えて、それ独自の表現手段を完成したのです。しかし、実際には、情動は単に物理的な環境とは異なる環境に属しています。情動がその効果を示すのは、それとは別の平面なのです。この情動の本性は明らかに、個人のあいだに伝わる強い伝染性をもつというこの本質的な特性にもとづいています。情動は、個人間の関係をその内に含んでいます。情動は集合的關係に属するものであり、情動における環境とは、生きた人間の環境なの

です。

情動は、表現のシステムである以上、その情動表現に身をゆだねた人びとには、もともとその意味を感じとる能力があったはずで、そのように運動性と感受性とが直接的に結びついているということが、先に見たとうり、情動の素材である緊張活動の本質的な特性なのです。痙攣と感覚には、最初ある種の同一性と相互性があり、それによって両者は直接的に互いにつながりあうのです。」(172～3頁)

ワロンはこのように、情動を人類史の初期の社会形成力と見なすだけでなく、今日も人間を社会的に結びつけていく役割をもっているとしている。自動作用や知的活動の場合は、人間と環境とを主体と客体というように区分して、そこに働く合理的作用、という見地から見るのが可能だったが、しかし、情動の場合、環境が主体としてある生きた人間になるから、従来の哲学的枠組からは完全に見落とされてきたのだ。そして、ワロンは、情動のこの特質から、自動作用や知的活動における主体-客体関係という観念自体、哲学的主観(ある種の姿勢)の産物だと見ているのだ。

「活動とそれにくっついて意識とのあいだに、第三の要素を持ち込む必要はありません。意識は最初、活動と混濁して、それは同時に活動の結果でもあり、また活動への刺激でもあります。ですから意識は活動のもっとも近い対象、あるいは目標でもあるわけです。意識は、特に姿勢機能と結びついて、そのいろいろな変異に従っていくのですが、一方では逆に意識のほうはそのモチーフとなって、姿勢機能の種々の変異を惹起し、また方向づけていくこともあります。一方が分化していけば、他方もかならず分化します。この変異の現われがさらに複雑になっていっても、この結びつきが弱くなるということはありません。実際に機能を行使していくにつれて、それに呼応する感受性は洗練されていきます。このように両極の反応が相互的に発達していきます。この両極の反応がそれぞれ属している系は、次第次第にはっきり分化し

ていくのですが、その相互の密接な結びつきは切れることはありません。」(173～4頁)

ヘーゲルは、意識を自我と対象(自我も含む)との関係と捉え、そして、これを実体としてだけでなく、主体としても捉えることで、意識を活動とみなし、思考の弁証法を展開した。他方マルクスは、活動のうち、労働の二重性に注目して社会的生産のシステムを分析し、資本家的商品生産のメカニズムを明らかにした。ここでは、ワロンは、心的生活を分析するにあたって、活動を姿勢機能と意識との両極から成るものと捉え、それぞれが分化していく様相を双方の結びつきを切ることなく追求しようとしている。恐らくワロンの『子供の思考の起源』上・中・下は、この方法に従っているのだろう。

次の「精神説と末梢説の欠陥」では、ワロンは双方の説を紹介して、双方とも個人と社会とを対置して、個人が社会的生活の所産であるとみなしていないとコメントし、次のように述べている。

「たしかに生理学的人間には、情動の発達をもたらす一つの機能系——姿勢活動——がそなわっています。しかし、もし社会的人間がこの生理学的人間と一体をなしていなかったとすれば、この系はどのようにしても自分自身の外へ超え出ることはできなかったはずで、集団の生活、同一状況に対する同時的反応、相互的接触こそが、共同的な反応や表現を介して、人びとの感受性を相互に交わり合わせてきたのです。それゆえに、この共同的反応はやがて、たとえある出来事によってただ一人の人に生じたものであっても、一種の身振りの伝染によって、一緒にいるすべての人たちに、対応した情意——運動複合体を惹起する力をもつようになったのです。」(176頁)

ここまで来ると、ワロンの情動論の構えが明確になってくる。情動は人類の最初の集団生活を実現する際のコミュニケーションツールであったが、それはその後の集団生活のなかで、人びとの感受性を相互に交わり合わせて、姿勢の表現を洗練させていく。こうして、最初はまだ一人の人間の身振りであっても、それは伝染し

て、一緒にいるすべての人たちに、それに対応した情意——運動複合体を惹起してしまう。そして、このような非言語的コミュニケーションが、個人を社会に結びつけていて、人が表象を形成するときの枠組となっている。このような構えにもとづいてワロンは次の4項目で、情動と意識との関係を社会生活や知的生活や現実的矛盾とのかかわりで考察している。

#### 4) 情動の斉一性

「態度(姿勢)の斉一性と意識の統一性」では、ワロンはこれまで述べてきた情動の伝染性をひきついで、それが社会の中で斉一性をもつようになるかみている。

「情動は、こうして先導者も追従者も含めて、多くの参加者をたがいに結びつけ、やがてこれが個人相互間の促し合いの系を構成するようになってきたのです。この系は、場面や環境にしたがって多様化し、また同時におのおの人の反応や感受性を多様化させてきました。個々の人びとの反応がたがいに一致し、また同時に生じるようになると、集団は安定性を増し非常に大きな力を得るようになります。このようにして情動の進化のなかで有用性という要因が次第に重要な役割を果たすようになったのです。情動は、ひとつの制度のようなものになったのです。」(176頁)

ワロンによれば、情動の斉一性が作りだされるとともに、それが社会集団の維持にとっての有用性として利用されるようになり、例えば未開諸部族の儀式のように制度化されていく。この情動の儀式的側面は現在の人間の情動にも残っている。それだけではない。ワロンは「社会生活における情動の役割」で、この儀式性が単なる残りものではないことに注意をうながしている。

「情動は集団のなかに一致した反応、姿勢(態度)感覚をもたらすことができます。そしてまさにそのことが、情動が人間社会において最初に果さねばならなかった役割なのです。

今でもなお情動は、各人の制御を超えた一種の一般的同意によって大衆を生み出し、群衆を

活気づけるものです。情動は、しばしば集合的な熱狂を惹きおこし、個人の理性を打ち負かしてしまうことがあります。情動の及ぼす効果は素早くまた全体的であり、反省の力を惑わせてしまうのです。個々人のあいだに組織された技術的、概念的な関係のないばあい、とくに情動がよく働きます。」(177～8頁)

ワロンによれば、現代の社会にあっても、個々人がきちんと組織されていない場合、つまり、それまでの組織がゆるんでしまっただけでバラバラになっているようなときに、情動が一つの行動をとらせる力となると見ている。というのも、情動は、人類最初の社会における社会形成力だったから、この属性は、人々が組織されていない社会では、いまもって有効性を発揮するのだ。そして、新生児にあっても、情動の働きによって、他者とのコミュニケーションを実現している。

#### 5) 知と情動の拮抗関係

ワロンは「知的生活との関係」では、知的生活と情動との関係について考察している。

「知的生活は、社会的生活を前提にしてなりたつものです。言語をはじめとして、知的生活に不可欠な道具には、当然、人間的環境の存在が前提されているのであって、そこで作られる道具はすべて人びとに共同のものでなければならなかったはずで、この人間的環境の最初の条件のひとつとして、情動生活をあげることができます。これは意識の間個人的関係の最初の場です。環境の刺激に対して生体が直接に反応するのではなく、外の場面にふれて精神運動的装置を塑型していく活動、こうした活動が情動によって生まれてくるのです。そして状況の多様性によって情動が種々の姿勢系、種々の心的形成物へと分化していくに応じて、情動は表象活動の出発点となっていきます。表象活動を諸感官の単純な活動と混同することはできません。実際、表象活動はこの単純な活動のうえに、図式、象徴、像、観念などの一連の諸差異を重ね合わせるのです。それらはみな現実に対置されねばならないという点にその本質がありま

す。」(178~9頁)

ワロンは表象活動を諸感官の単純な活動と混同できないとし、それを、単純な活動に重ね合わされたものとみなしている。ワロンは言語を例にあげてこの点について説明している。それによれば、言語(発話)の道具、分節音言語はもとをたどれば、情動のもとになる同じ姿勢的・緊張性活動に帰着させられるが、しかし、言語の発達を情動から単線的な系統発生としては想定できない。情動によって人間の活動は新しい水準に移行したが、そうすると、この新しい生活様式が、他の条件が許すかぎり、環境や主体が与えてくれるすべてのものを利用する。したがって、それぞれのものがすべて先行のものに還元できるわけではない。

この人間の社会的活動の発達のイメージについて、ワロンは「弁証法的矛盾と心的現象」でさらに一般的に説いている。まず、情動という現象が研究者に注目されない要因をあげることから論をおこしている。

「情動表出は、知性の統制力によって、あるいは単に知的活動を行うだけで妨げられ抑えられますし、逆に情動表出が生じれば必ず知的機能は変化してしまいます。今日では、社会的環境においてすべての関係が制度や技術によって統制され、知的操作がますます優位をしめるようになってきているために、情動はとくに活動の混乱と考えられるようになってきました。しかし、それでもなお情動は、多少とも潜在的な状態において、やはり個々人の関係を成り立たせるの

に必要な基盤なのです。」(181頁)

表象と情動とが拮抗関係にある、ということから、表象、つまり知的生活が優位を占める現代社会では、情動は活動の混乱としてしか捉えられなくなっている。これに対して、ワロンは次のように述べて、情動研究の筋道を示している。

「このようにみえてくると、情動の研究者たちのあいだにみられる対立や矛盾は、実は現実の事態に対応していることがわかります。心的生活の静態的分析の枠を出ない研究者たち、あるいは心的生活のなかかに単一の平面しか求めず、心的生活の現象を一定の機能や要因の作用の結果だとか、その組み合わせの結果だとか考えない研究者には、情動は逆説的であり、説明不可能です。反対に段階的に展開していく心的生活の発生から考えていけば、情動をきれいに説明することができるのです。各段階は、たしかにその先行段階に出発点をもっているのですが、段階を超えるごとにその段階間の差異によって、そこにはまったく異なる活動様式が生じます。各段階はただ単に引き続いて生じるのではなく、段階間には矛盾があるのです。この矛盾を経て、心的生活は新しい平衡に達し、新たな豊かさを得て営まれていくのです。」(181~2頁)

ワロンの提起を生かすと、どのような社会形成論、あるいは自我論が描けるだろうか。意識や言語の限界を無意識ではなく、情動の社会性に見るワロンからは、何か新しいイメージが紡ぎ出せそうな予感がしている。

## B. ワロンの社会論

### 第1章 子どもの社会学的研究

#### 1) デュルケムの提起

デュルケムは『宗教生活の原初形態』(岩波文庫)の結論部分で次のように述べている。

「要約すれば、ほとんどすべての主要な社会的制度は宗教から生まれた、とわかっていい。ところで、集合生活の主要な側面が、最初は、まず、宗教生活のさまざまな諸側面にすぎないと

いうからには、明らかに、宗教生活は、集合生活全体の卓越した形態であり、いわば、その集中的表現でなければならぬ。宗教が社会の本質的なものを生み出したとするならば、それは、社会の観念が宗教の魂だからである。

したがって、宗教力は、人間力であり、道徳力である。もちろん集合的感情は、外的対象に固着してでなければ自らを意識しえないから、宗教力は事物から自己の特色あるものを取り入れずには構成されなかった。すなわち、こうして、一種の物理的性質を獲得したのである。」(下、327~8頁)

デュルケムによれば、「社会的事実」とは、個人のうえに外部的な拘束をおよぼすもので、個人的な表現物とは独立したものなのだが、宗教が人類の歴史において、はじめてそのような社会的事実をつくり出したものとみなしている。デュルケムが分析した原始宗教にあつては、宗教的礼拝において、社会を構成している諸個人が集合し、共同で行動することになるが、これによって社会が自らを意識していく、と見たのだ。人類が最初の共同行動を組織的に行うことで社会を「主体」として目覚めさせたものとして、宗教が捉えられている。

次にデュルケムは論理的思考の起源をたずね、それを宗教によって作り出された集合的意識に求めている。集合的意識によって、ある種の「主体」となった社会は、やがて非人格的かつ組織化された固定した思考(論理的思考)への道を拓き、長い歴史的過程を経て、「論理的組織は、社会組織から分化し、自律的となる」(下、372頁)というのである。

「非人格的な理性が集合的思考に与えられた別名にすぎないことを、人が認めるとき、あらゆる神秘は解消する。というのは、集合的思考は、個人の集団によってのみ、可能だからである。集合的思考は個人を前提するものであり、個人は集団をなさなければ維持できないから、個人もまた集合的思考を前提しているのである。目的と非人格的真理との王国は、特殊な意志と感性との協力によってのみ実現される。また、この王国に特殊な意志と感情とが参加できる理

由は、まさに、それらがその王国に協力する理由と同一である。つまり、われわれには社会的なものがあるから、われわれには非人格的なものがあるのである。しかも、社会生活は表象と実践とを同時に含んでいるから、この非人格性は、まったく当然にも、観念にも行動にも拡充していくのである。」(下、373~4頁)

社会と社会的事実としての集合的意識についてのデュルケムのこのような考えは、一部にデュルケム学派を形成したが、他の人々には受け入れ難いものだった。ピアジェはデュルケムを評して、次のように述べている。

「社会というものを『集合意識』という単一の全体に解消し、社会の働きを物理的または精神的な『拘束』という単一のプロセスに解消する」(『ピアジェ・ワロン論争』ミネルヴァ書房、109頁)。

デュルケムの学説には、たしかにこのように批判される根拠はある。しかし、ワロンは、デュルケムの学説について内在的なコメントをしている。ワロンのコメントを紹介するところから、われわれ自身の社会形成論を構想していきたい。

#### 2) アルプバックスの説

ワロンは「子どもの心理学的研究と社会学的研究」(『ピアジェ・ワロン論争』所収)で、ピアジェの発達論の批判を試みているが、その前段で、心理学的観点と社会学的観点についての学説の整理を試みている。ワロンはまず、フランスの心理学研究で支配的な個人主義的立場を検討し、それが「自身の内に閉じた個人の存在を前提としている」(83頁)とみなして、この説を批判的に紹介した上で、次に社会的立場として、デュルケムに始まり、彼の弟子たちの説を紹介している。そこで、ワロンのデュルケム派の批判的介绍に注目しよう。

ワロンはデュルケムの説が「集団的表象」(集合的意識)に独占的役割を与え、個人が理解したり、観察したりできる表現可能なすべてのものは、個人でなく社会に由来するものとみなしていると捉えている。そして、デュルケムは、

信念の体系があつてはじめて集団は存続することが出来ると考えたが、しかし、デュルケムは、観念の儀式的、概念的画一性にしか注意を払わなかつたとし、次のような批判を提起している。

「もし、諸個人を互いに結びつけることのできる感じ方やリズムという接着剤がなかつたなら、集団それ自体はどのようにして存在できるのだろうか。また、もし、集団の中の諸個人に次々と呼び覚まされ伝わっていく調和的な反応——このような調和的反應については、デュルケム自身が未開人における宗教的事実を研究した際に観察し、詳しく報告している——がなかつたなら、集団はどのようにして存在できるのだろうか。観念が開花する基盤を各個人の中に作り上げているのは、こういう事実なのである。こういう事実こそが、まさに、観念を個人的なものとする心理学に道を開くものなのである。」(84頁)

ワロンは個人の意識を考察する際に、個人と社会という互いに対立する二つの極への分極化を統合しようとし、社会的立場をそれとして評価しつつも、しかし、デュルケムの場合、観念が社会的なものであることを主張したこと自体はよいとして、それだけでは集団が集団として存続しないと批判している。そして、観念がすでに社会的なものとして成立している社会にあつても、諸個人を互いに結びつけることのできる感じかたやリズム(ワロンの言う情動)という接着剤がなければならず、そして、この事実にもとづいて、個人主義的立場の心理学が生み出されているというのだ。

このような批判を投げかけたあと、ワロンは、デュルケム学派のアルプバックスとブロンデルの説を紹介しながら、社会的立場の豊富化を試みている。ワロンによれば、アルプバックスの説は次のようなものだった。

「アルプバックスは、精神の中に何かあるものを浮かび上がらせようとするどんな試みも、時間あるいは空間の中にそのものを位置づけるなんらかの能力を前提としていることを証明しようとした。つまり、そのことは、識別の利用ということであつて、私たちの生きている社会

だけがその識別の道具となる観念を私たちに与え、その識別が行われる機会を私たちに提供してくれるのである。こういう準拠を取り除いてみよう。そうすると個人的なものはなにも残らないか、あるいはわずかながら残り得たとしても、それは表出不能か個別化することができないままであろう。」(85頁)

ワロンは、アルプバックスがそれまで心理学者たちが、本質的に個人的なものであり生物学的レベルの事実と見なしていた記憶という現象が、実はそうではなくて、社会学的主張を裏づける現象であることを示そうとしたと見ている。その際、デュルケムのいう集合的表象という社会的次元の創造物がなければ、個人という知的存在もありえない、という説をふまえているが、しかしアルプバックスは、「個人に自発性の存在することを忘れなかつたし、社会的準拠は内容に形式を与える手段となるだけだということも忘れなかつた」(85頁)という点でデュルケムとは異なつていた。ワロンは次のように述べている。

「そもそもの出発点には、それぞれの個人の欲求をとらせた、その場その場で多様な表われかたをする感受性を仮定しなければならない。デュルケムは、個人を、社会からその観念ばかりでなく感じ方までも受け取る単なる行為者とみなしているようである。彼は感覚を、個人から個人へのコミュニケーションを可能とする交換の方法に還元してしまう。アルプバックスはこういう極論に陥ることはなかつた。彼の場合は、個人とか個人的な責任という余地を残しておく。」(85頁)

このようにワロンは、アルプバックスによるデュルケム説の修正について好意的に評価している。

### 3) ブロンデルの説

ついで、このアルプバックスの説に基本的に同意しつつも、独自の見解を述べたブロンデルについて、ワロンは非常に興味のある紹介をしている。ブロンデルは「同じくらい重要な二つの要因、つまり、心理的なものと社会的なもの

を区別すべきだ」とし、「個人とはこの二つの実在の交流する場」(86頁)とみなしたというのだ。だから、個人のなかに社会的なものを認めるという点に関しては、ブロンデルもアルプバックスと同じようなことを述べているが、それにとどまらず、意志の領域についても社会的なものの痕跡を見たとしている。

「ブロンデルは、大部分の心理学者や形而上学者のように、意志的行為を個人の自発性の一番間違いない表われと考えたりはしなかつた。また、主体の自律性がそこに最もよく実現された表われ、あるいは主体の自律性という幻想を最もよく生じさせる表われと考えたりもしなかつた。そうではなく、彼は意志行為の中に、本来、共通意識に近い位置にある動機によって最も説明しやすい行為、それゆえ最も画一的な行為をみた。反対に、日常の規範に照らして自分の行為を点検する以前に反応してしまうというように、自分の本性に身を委ねてしまう場合、私たちは、衝動とか、意志から独立した反応とか、説明不能な偶発事などについて語るようになる。したがって、個人は、最も自由であると自分で思っているときこそ、何よりもまず社会的要請によって導かれているのである。」(86~7頁)

ワロンの紹介によれば、ブロンデルは、意志行為のうちに社会の規範への順応を読み取っているようだ。個人が最も自由であると自分で思っているときこそ、何よりもまず社会的要請によって導かれている、という考え方は、物象化論に接近している。しかし、もっと興味深いのは、個人の心理的なものについての次のような考え方だ。

「ベルグソンの心理学にしたがい、ブロンデルは、外界に由来するあらゆる決定作用を心理的なものを変形する作用とみなす。ベルグソンが心の機械化だとして述べているこの決定作用は、ブロンデルにとってはちょうど社会的装置のはたらき——儀礼的、言語的、イデオロギ的、法的、歴史的装置のはたらきなど——をあらわすものである。それゆえ、ブロンデルは、私たちの生活の中にある、習慣、意見、説明、

動機づけなどのすべてのものを外部に起源をもつものとして抽出する。こうして、あとに残ったものが心理的なものということになる。ブロンデルはこれを『純粋に心理的なもの』とみなした。この純粋に心理的なものは、ブロンデル自身に言わせれば、自己に引きこもり、外界とのあらゆるつながりを失ってしまった場合、病的なものとなる。」(87頁)

ブロンデルはここで、心理的なものと社会的なものの交流する場としての個人の心理から、社会的なものをはぎとっていった、最後に残るものを「純粋に心理的なもの」と名づけ、これは病気の状態で表出されると見た。この点についてワロンはひきつづき述べている。

「実際、純粋に心理的なものは、病的なものが生み出すこの自閉的な意識状態の中にか現われない。だから、もし純粋に心理的なものを見出したければ精神病者を見にいけばよいだろう。彼らは社会の中では部外者ようになってしまっているが、同時に、内部からは非常に強い感覚圧力を感じて生きている。彼らはもはや共通の思考の決まりに順応できなくなっている。自閉性によって外界の影響から閉ざされた精神病者にあつては、了解不能な言語が観察される。その言語は、知的教育のなごりが感じられる話しかたで話される場合もあるのだが、混乱していて、奇妙でばかげた、全く意味不明の形態をとるのが普通である。だから、精神異常の中に見出される心理的なものは、私たちが通常、社会生活に参加している正常な個人の心理学として考えているものとは、何の類似点もないのである。」(87~8頁)

ワロンによって紹介されているブロンデルの説によれば、心理的なものと社会的なものとの交流する場としての個人の心理は、必ず社会にも起源をもっているが、自分にひきこもってしまった病的な個人にとっては、「純粋に心理的なもの」が表現されるという。だが言葉で表現されたとしても意味は全く分解している。ひきつづき、ワロンの紹介をみよう。

「こういう意味の分解がおこるのは、表現不能な純粋に心理的なものをあえて表現しようと



する、およそ不可能な内的要請に応じようとするからである。ブロンデルによれば、純粋に心理的なものは、本質的に主観的なものであり、その主観的なものは個人の正常な生理の中では大いに抑圧されてしまうため、社会生活によく適応した人間の意識には全くのぼらなくなる。この純粋に主観的なものを見出そうとすれば、その感情的基底を探らなければならない。ただ精神病患者だけが、その感情的基底を意識的にぼらせることができるのである。」(88~9頁)

このようなブロンデルの説にワロンが同意しているかどうかは明らかではない。人間の心理についての一つの仮説としてなら、認めているようだ。

#### 4) ゲシュタルト心理学の陥穽

ワロンは、個人主義的立場と社会的立場についての諸説をまとめたあと、全体主義的立場として、フィヒテとゲシュタルト心理学の紹介をしている。フィヒテについてはともかく、ゲシュタルト心理学については、その指導的メンバーがドイツを追放されたあと、ナチズムによってその学説が利用されたとワロンは述べている。

「ナチズムは個人を集団に解消するためにこの学派を利用した。個人は一つの要素、一つの部分にすぎず、それだけでは固有の意味をもたない。個人は、個人が組み込まれている全体に

よって存在価値を与えられるのだから、そこでは、個人は多かれ少なかれ置き換え可能なものなのである。個人を全体の中の他の要素(他者)に結びつけるためにかきたてられる感情は、情動的融合の感情であり、その感情が極端なところまで高まれば自我を忘れ他者を忘れる状態にまで至る。構造が至上のものであり、それは部分の中には見出し得ないものである。実際のところ、諸個人のこうした集合は社会ではない。それは群れである。そこには常に、同じような非人格的な融合、同じような野蛮な混同性、同じような分析能力の欠如が見られる。出発点が個人であれ集団であれ、結果はいつも個人でも社会でもない、全体的で群居的な何ものかとなる。」(92頁)

ワロンは情動が人々の間に伝染して社会的なものを作り出すことに注目しているが、この見地から、ナチズムを社会ではなく群れと捉えている。個人と社会との関係づけのない単なる一体感を組織すると、その集団は社会とはならず、単なる群れとなる、というのだ。これは非常に重要な問題提起である。

さて、当初の予定では、社会的立場の紹介にとどめようということだったが、ワロンの積極的な見解を知るためにも、ひきつづき章をあらためて、ワロンのピアジェ批判を見ておこう。

と思われる。」(92頁)

このような見地から、ワロンはピアジェの発達論を、最初の新生児のときの自閉性からやがて自己中心性をむかえ、外界に自分自身の主観性を浸透させるアニミズム期を経過するが、その後、自己中心性が減退し、客観的な認識能力が発達していく、とまとめたあと、「絶対的な個人主義から出発して、ピアジェは知能の発達を社会的な意識の発達に従属させている」(95頁)と批判している。

ピアジェによれば、「知能が客観的なものと

なるのは社会化によってである。社会は精神発達のある一時期に子どもに介入するようになる」(95頁)というのだが、この考えは観察のデータに一致していないとして、ワロン自身の見解を次のように対置している。

「彼らのテーゼは、子どもとその環境との実際の関係に合致しない。その関係は、単純な連続ではないし、純粋の推論や知的直観に基づくものではない。むしろ子どもの生は、はじめから、その環境と混ぜ合わさったような関係にあり、精神現象のあらゆる平面の作用や反作用が両者の関係を媒介しているのである。」(96頁)

ワロンはこのようにピアジェを批判していく前段で、ピアジェがプロイラーから借りてきて、新生児の最初の状態とした自閉性についてプロイラーにさかのぼって、その概念を規定している。

「プロイラーによれば、自閉性は、あらゆる正常な個人とその環境を結びつけているきずなが漸絶することによっておこる。……患者は、次第に世界から切り離され、……自分の活動がばらばらになることによって無力になり、もはや、自分の興味とか、最も原始的で最も内奥の感受性とか、感情的な、あるいは身体内的な印象にしか従わなくなる。その結果、しばしば奇妙な常同行動が現われる。こういう常同行動は、それが生ずる感情的核にまで深く切り込んでいくことが難しいので、了解不能なものとなる。言語そのものは、相互理解の追求というその機能から切り離され、今や、意識の唯一の対象となった身体内的な感覚という表現不能なものをあえて表現しようとする欲求によって支配される。その結果、言語は変貌し、新語で満たされ、通常の意味の歪曲が生じ、ついには理解不能となる。自分だけに心を奪われるから、患者は、もはや、周囲に対して、無気力になるか、防御反応や拒否や否定の身振りによってしか反応しなくなる。」(93~4頁)

自閉症をこのように規定するならば、ピアジェが新生児に見出そうとしている自閉とは全然違うことに、ワロンは注意を促している。「分

裂病患者の他者に対する拒否的態度あるいは無関心と、幼い子どもが周囲と取り結ぶ生き生きした関係との間には、本質的違いがある。」(96頁)と。そして、新生児が人間的環境に依存することによってしか生きられないことに、子どもの社会性を見、そして、それは決して自閉性と見るべきではないと主張しているのだ。だから、子どもに最初に役立つ関係は物理的世界との関係ではなく、人間との関係であり、子どもの社会性とは、大人の社会性とは異なるが、独自の社会性をもつ存在だとワロンは考えている。

「子どもに最初に役立つ関係は、物理的世界との関係ではない。物理的世界との関係が現われるときには、その関係ははじめは純粋に遊戯的である。そうではなく、子どもに最初に役立つ関係は、人間との関係、理解の関係である。その関係に必要な道具が表現手段なのである。こういうわけで、子どもはたしかに社会の意識的な構成員ではないかもしれないが、やはりもともと全面的に社会に向けて方向づけられた存在なのである。」(97頁)

ワロンによれば、子どもは他の人間から働きかけられる存在だ、ということになる。主体としては自立していず、その場面に解け込むことで他からの働きかけを受け取る。人間が主体として自立するのは、自我を確立することによってだが、そして、自我の確立が本当の意味での主体としての自立ではない、という保留をつけた上でだが、自我を獲得していない子どもは、他人から主体として見られ、そのようにあつかわれることで成長していける。ワロンは、このような新生児のコミュニケーション能力を情動に求めている。

「私は、折りに触れて、最初の数ヶ月から子どもの情動的反応と周囲の反応とがもつ重要性について強調してきた。こういう重要な意味をもつ両方の反応によって、ある種の感情的な一体感が確立されるのだが、このような感情的な一体感はおそらく人類の歴史においてそうであったように、子どもにおいても観念的な関係に先行して現われるのである。情動の役割は、おそらく、分節言語に先行する表現システムと



いう点にあるのであろう。このシステムは、一種の伝染によって強力な集団的反応を引き起こすのに欠かせないシステムである。情動は、たとえば未開人の儀式にみられるような情動として文明化されていったが、今日でも群衆の集合反応を引き起こす手段として残っている。」(97頁)

情動による社会性によって、子どもは生まれたときから社会的な存在であるとワロンは見ている。「情動によって、個人は自分自身に属する以前にその環境に属している」(97頁)のだ。

だから自我も「意識に最初から備わっているものでなく、ひとつの獲得、ひとつの征服である」(98頁)ということになる。

もっともワロンの自我論は、子どもに視点が定められていて、社会から見られているという、もう一方の要素については十分ふまえているとは言えない。しかし、情動論を生かせば、社会からの視線の内実とは、実は、情動だ、ということにならないだろうか。今後の検討課題である。

## C. ギブソンの『生態学的視覚論』(上)

### はじめに

1月11日のPC講座で、ギブソンの『生態学的視覚論』(サイエンス社)の紹介をおこなったが、とりあえず、ギブソンについての感想文のようなものを書いてみよう。

ギブソンの本を読み始めて最初の感想は、子供の頃よく読んだ科学の本の類に再会した、というものだった。中学の頃、図書委員をしていて、中学の図書館にあった科学についての本を片っ端から読んでいたが、その時の感覚が甦ってきたのだ。もっとも、まだ論理的な思考が出来なかったせいか、『昆虫記』は部分的にしか読めなかったし、『種の起源』も難しくて読めなかった。科学の本は大抵、それまでの通説をとりあげて、それが役に立たなくなっていることを示し、次いで、新しい説を提起してそれを実証する、というように組み立てられている。ギブソンの本も、ニュートンの時間、空間概念や、物理学的な運動論が、生態学の見地からは役に立たないことを示し、生態学的力学や、生態学的光学を提起している点で同じパターンを踏んでいるのだ。

次にギブソンの新しい提起は、非常にわかり

やすく、また、納得もできるのだが、何故そうなのか、という根拠が十分に示されていない、と感じた。個々の説明について、全くその通りだと思いつつも、何故そうなのか、という点になると何か欠落していて、一寸不安になってくる。

第三に、上記の点と関連すると思われるが、ギブソンはプラグマティズムの立場に立っていて、だから、ニュートンの力学は視覚という生態学的な問題を考慮する場合には役に立たない、といって、新しく生態学的光学を提起しているのだが、この役に立たない理由もあまりにも簡単で、十分考慮されていない、ということだ。逆にみれば、ギブソンの生態学的光学は、視覚についての研究に役立てばよい、ということで、プラグマティズムの立場に災いされて、その成立根拠について究明することに意義をみだしていない、ということになっているようだ。

こんな感想をもったことで、とりあえず、ギブソンのプラグマティックな考え方についての異論をまとめてみようという気持ちになっている。というのも、生態学的光学や生態学的力学

は結局は集合論などの数学的処理が問われてきて、私自身の手には負えないし、でもギブソンの提起はあまりにも重要なので、そのプラグマティズム的偏向から救い出してみたいのだ。なお、ギブソンのアフォーダンスを始めとする基本的

な問題提起は、佐々木正人『アフォーダンス—新しい認知の理論』(岩波書店)にコンパクトにまとめられているので、この知識を前提に論じることとする。

## 第1章 知覚環境の諸相について

### 1) 動物と環境の相互関係

ギブソンの本は4部から成っている。I. 知覚環境の諸相、II. 視知覚に関する情報、III. 視知覚、IV. 画像による表現、がそれだ。ギブソンの本のテーマは、「我々がいかに見るのか」(3頁)ということであり、また「なぜ、物がそのように見えるのか」(3頁)ということだから、まずIで環境について生態学の水準での説明がなされ、次にIIで知覚に役立つ情報としての光について究明され、そしてIIIで知覚過程について述べられている。IVは補足的な部分なので、今回はとりあげないでおこう。

さて、ギブソンによれば、環境とは知覚し、行動する生活体としての「動物の周囲の世界」(7頁)のことであり、植物は感覚器官や筋組織をもたないのだから、無機物と同じように扱われる。だから、ギブソンにとっての問題は、単なる環境の諸相ではなくて、動物と環境の相互関係の諸相なのだ。この点について、ギブソンは冒頭で『動物』と『環境』という二つの語は互いに切り離すことの出来ない対となっているということが看過されがちなので、両者の相互関係について改めて考えてみることは意味がある。それぞれの語は常に一方の語を含んでいる。動物は自分を取り巻く環境なくしてどうい存在しえない」(8頁)と述べている。

ところでこのように考えると、物理学的環境の概念の吟味が必要となる。

「動物と環境の相互関係は物理学やいわゆる自然科学によって説明される類のものではない。空間や時間、物質、エネルギーなどの基本的概念は当然のことながら、生活体—環境の概念、

あるいは種とその生息環境の概念に導くものではない。その代わり、物理学的概念はおそらく、動物を物理的世界の中で極端に複雑なものとして考えられることになるであろう。動物は物理的世界の中の高度に組織化された部分として考えられても、それはなお一部分であり、一つの物に過ぎない。こうした考え方は、動物という対象が特殊な仕方で囲まれているということ、すなわち、ある環境が生き物を取り囲んでいる仕方は、一群の物体がある物理的な物体を取り巻いている場合とは異なっているという事実を無視している。したがって、物理的環境という用語は、我々を混乱させることになり、本書ではこの用語を用いることを出来るだけ避けることにする。

「動物はすべて多少とも知覚者であり、行動者である。古風な用語を使うと、動物は知覚する力があり、自発的に動くものである。そして、環境の知覚者であり、環境内の行動者である。しかし、物理学の世界を知覚するわけでもないし、物理学の時間と空間の中で行動するのではない。」(8頁)

ここでギブソンは、いわゆる物理学的世界観にもとづく環境世界についての解釈が当を得ないものであることについて述べている。環境世界についての解釈は、物理学で定義されている時間や空間や運動の概念によってはなしえない、というのだが、その説明の仕方がすこし強引だ。

もともと物理学は、世界の事物を質量に還元し、量の相互関係を運動へと抽象し、抽象的な状態におけるその運動法則を解明したものだ。だからそれは、現実を量と運動という面から見る限りで妥当するものであり、それ以外の要素

を持ち込むと理論的な処理が不可能となる。そうであるなら、物理学がギブソンの念頭においている生態学的環境の解釈に役立つのは当たり前だ。

例えば、ギブソンとは逆に、物理学的世界という一つの抽象世界から上向して行って、生態学的環境に到る途をたどることはできないのだろうか。抽象的な時間、空間が仮定され、そこでの事物は全て質点へと還元され、それらの運動が記述される、という物理的世界から、生きものと環境との相互関係という生態学的環境世界へと上向すると、時間は生命の流れとなり、空間は万物で満たされ、運動は、生命活動や動物の活動といったものを含んだ多様なものとなる、というように。

とまれ、ギブソンの言う環境とは、ミリメートルからメートルの範囲に含まれ、土の粒子から小石、岩、草の葉など全ての事象が環境の構成単位で、これらは入れ子状態になって全体の環境を構成している。そして、環境の文字通りの基礎は地面で、これは平らになろうとする傾向をもっている。問題は地表面における事象の変化であり、過程、変化、継起を知ることだ。その際に地上の環境の形態としてある配置の不変性と変化、あるいは変化のもとでの不変性(持続性)に注目することが必要だ。

「かなりの部分が固定しており、一部は柔軟であり、また大部分は不動で、部分的に動くことのできる環境、換言すれば、多くの面では不変だが、他の面は変化する世界、とはいっても一方の極が完全に固定し、他方の極が混沌としたというものではない、このような現実の環境世界こそ我々の研究にとって重要な事実なのである。」(15頁)

ギブソンは、環境世界の現実をこのように述べているが、しかし、よく考えてみれば、これも一つの抽象像である。もちろん、抽象像だからダメだと言っているのではなく、ギブソンがどのような視点から現実を抽象しているかを知ることが大切だ。この問題についてはあとで触れるとして、次に、ギブソンの運動についての考えを紹介しておこう。

「環境内の物の運動は空間の物体運動とは異なった種類のものである。……事実、環境の運動はアイザック・ニュートンによって研究された運動とは程遠いので、それは単体の位置の変化よりむしろ構造の変化として、点の場所の変化より形の変化として、あるいはその言葉の一般的意味における運動というよりむしろ配置の変化と考えた方が適している。」(15頁)

ギブソンのこのようなニュートン力学の評価の仕方にも引っかかる。ニュートンは環境世界を抽象して力学的世界に到達したのであって、たしかに環境世界とは別の世界だと言えないこともないが、しかし、それは抽象化された環境世界であり、ニュートンの法則はギブソンが念頭においている環境の運動をも支配している。もちろんニュートンの力学で、環境世界の運動の具体的な枠組を記述できないことは明らかである。しかし、ギブソンのように、もし引力や重力が「環境の運動」に程遠い、というなら、環境世界そのものの成り立ちを否定してしまうことになるだろう。もちろん、ギブソンが言いたいことはよくわかるのだが。

## 2) 媒質、物質、面

ギブソンは生態的光学の見地からみた環境を、動物と環境との相互関係と捉えようとして、次に、環境を構成する基本的要素として、媒質、物質、面の三つを上げている。

「古典的物理学によれば、世界は空間内の諸物体から成っている。したがってややもすれば、我々は空間内の諸物体から成る物理的世界に住み、我々が知覚するものは空間内の対象から成る、という仮定に誘われる。しかし、この仮定は非常に疑わしい。地上環境は媒質と物質、および両者を分かち面によって適切に記述される。」(17頁)

ここで古典物理学による環境世界の抽象とは別の、ギブソンによる環境世界の抽象について述べておく必要がある。先にみた動物と環境の相互作用では、ギブソンは、動物はどのようにして知覚するか、というテーマから問題に接近しようとしていたが、ここでは、視覚がどの

ように働くか、ということとして捉えられていることが明らかになってくる。

視覚、つまりものを見る、という見地から、人間と環境世界との関係を考えると、それは、光の関係だ、ということになる。つまり、ギブソンの生態学的光学とは、世界を見る人間を、世界と人間との光の関係と捉えて、環境世界と人間との関係を光の関数に抽象化し、光に還元したもののなのだ。

だから、古典物理学が環境世界を質量に還元したのと同じように、ギブソンは環境世界を光に還元する。そうすると、地上環境は、媒質(光を通すもの、空気、水)と物質(といっても物理的、化学的な意味ではなく、事象とか対象といった意味)と面(光を反射する)が環境の三大要素になるのは非常に解り易い。

逆に言えば、環境世界を動物との間の光関係に抽象することで、地上環境が媒質と物質と面とから成る、ということの正当性が出てくるので、この光関係の外では、環境世界はまた別の様相をもっている。

空間の中に諸物体があり、そこにわれわれが住んでいて、われわれが知覚するものは空間内の対象から成る、といった考え方をギブソンは誤りとして退けている。これはある種の認識論だが、このような考え方が古典物理学に根をもつものであるというのは、ギブソンの独断のように思われる。この種の認識論は、科学技術の発達による人工機械の世界が環境世界の中に、とくに人間が住んでいる領域に侵入し、拡がっていったことを土台にしているのではなからうか。

というのも、人工的世界はそれ自体自然ではあるが、しかしそこには空間内に人間がつくった諸物体があり、そして、それらの空間内の対象をわれわれが認識して利用する、というような仕組みになっていて、これがギブソンが否定している認識論を生み出しているのだ。

さて、ギブソンが環境世界を光に還元したと考えると、彼の独自の媒質概念と物質の面への注目が理解し易くなる。この二つの問題についてのギブソンの説を簡単に紹介しておこう。

ギブソンはまず、地上の存在が大地、水、空気(個体、液体、気体)から成ることを上げ、次にそれぞれの界面が一つの面を形成していることに注目している。湖底の地層と水、水と空気、空気と大地、このうち、陸上動物にとって最後の地面が最も重要である。

次に気体や液体は、固体がその中を動くことが出来、また光を伝達するという意味で媒質となっている。そして、光については、放射光よりも照明による包囲光を重視している。ギブソンは陸上の包囲光について次のように述べている。

「陸上の媒質(大気)はそこで光が伝達されるばかりでなく、四方に反射される領域である。すなわち、非常な速さでいろいろな面の間をあちこちとはね返り、そして一定の安定状態に達する。光は環境内の物質によってその一部が吸収されるので、絶えず光源から補われなければならない。しかし四方に反射、拡散している光束は照明と呼ばれている状態をもたらす。照明は、媒質内のどの点をとってみてもそこには包囲光があり、したがってあらゆる方向からその点に集まる光があるという意味で、媒質を『満たして』いる。後に明らかにされるように、包囲光は放射光と混同されてはならない。」(17~8頁)

包囲光は、大気という媒質のなかで光が一定の安定状態にあるときの環境世界のどの点をも包囲している光のことであり、当然、動物や人間の眼をも包囲している。この包囲光は、環境内の各点で異なるので、大気を光に満ちた媒質と捉えることで、物理学や光学などの科学によっては明らかにされえない高次の事実が明らかになると、ギブソンは考えている。

「私がいわんとする媒質の概念を理解するならば、知覚や行動についての全く新しい考え方に達するであろう。動物が動きまわることのできる(それはまた対象も動かすことができる)環境は同時に環境内のある源からくる光や音、匂いによって満たすことができる。媒質のいずれの点も、そこは見、聞き、嗅ぐことのできる観察者にとって可能な観察点である。そしてこ

これらの観察点は起こり得る移動の軌跡によって相互に連続的に結ばれている。したがって、幾何学的点や線の代わりに、我々は観察点と移動の線をもつ。観察者が点から点へと動くにしたがって、感覚情報、そして聴覚情報、化学的情報などが次々に変化する。この点で媒質内の可能な各観察点それぞれは二つとない点である。したがって媒質の概念は、空間の各点は固有なものではなく、相互に等価であるとする空間の概念と同じではない。」(18頁)

ギブソンが、動物と環境との相互関係というとき、結局はこの媒質の概念が重要だ。媒質を満たしている酸素や、包囲光や、振動や、拡散していく発散物を動物は探知するのだから、それらは動物が移動していくについて、情報はどんどん変化していく。だから「我々が知覚するのは空間内の対象から成る」といった認識論が正しければ、そのような認識しか出来ない人間は恐らく生きていけないだろう。知覚や行動はこのような認識論とは別の原理にもとづいているのではないか、ということで、ギブソンはアフォーダンスの概念を提起している。

「環境媒質の特性は呼吸を可能にし、運動することができ、見ることができるよう照明で満たすことができ、また振動や拡散する発散物を検知することを可能にしている。さらにそれは物質であり、上・下という絶対的關係軸を有する。こうした自然が提供するもの、またこれらの可能性ないしは機会のすべて、私はそれをアフォーダンスと名づけたと思うが、それは不変的なものである。これらの諸特性は動物の進化の歴史を通して全く変わることなく保たれている。」(19-20頁)

ギブソンは、環境が動物に提供するものをアフォーダンスと名づけている。これは不変的なもので、動物が利用するかどうかには関係ないものとされ、動物は知覚によってこれを検知するのだ。

### 3) 面の生態学的法則

大気や水を媒質と捉え、それが包囲光に満たされたものだと考えると、環境はそこにある物

質よりも、それらがもっている面が重要なものとなる。

「媒質は面によって環境物質から分離されている。物質が持続する限り、その面も持続する。すべての面は私が意味するところのある一定の配置を有し、その配置もまた持続する傾向がある。配置の持続性は面の変化に対する抵抗力に依存する。もし物質が気体に変化すると、その物質はもはや存在しなくなり、面もその配置とともになくなってしまふ。このような言説は環境を記述する新しい方法である。」(23~4頁)

物質を面で捉える捉え方は、面の配置が包囲光の配置を決めることに基づいているが、他にもいくつかの重要な事柄がある。ギブソンは物質を面で捉えることの重要性について次のように述べている。

「媒質、物質、と面の三つの組の中でどうして面がそれほど重要なのか、面は活動のほとんどがそこで行われている場所である。面は光が反射し、吸収される所であって、物質の内部はそうではない。面は動物に触れるものであり、内部は触れられない。面は化学反応が主として生ずる場所である。面は物質が蒸発し、または媒質に拡散する場所である。そしてまた面は物質の振動が媒質に伝達される場所である。」

(25頁)

このギブソンの提起は、十分に納得できるものである。ギブソンはこの考えにもとづいて、面の生態学的法則をいって、9つの定式を与えているので、それを紹介しよう。

1. 存続するすべての物質は面をもち、また、すべての面は配置を有する。
2. いかなる面も、物質の粘性に依存して、変形に対する抵抗を有する。
3. いかなる面も、物質の凝集性に依存して、崩壊(分解)に対する抵抗を有する。
4. いかなる面も、物質の構成要素に依存して、特有の肌理(きめ)をもつ、肌理には一般に配置の肌理と色素状の肌理がある。
5. いかなる面も、特有の形、または大きさの規模の配置を有する。
6. 面はおそらく光の中または陰で、強弱は

あっても照明されている。

7. 照明されている面は投射される照明を多少とも吸収し得る。

8. 面は、物質に依存して、特定の反射率をもつ。

9. 面は、物質に依存して、波長の異なる光の比反射率において特定の分布を有する。この特性は、分布の差は異なる色を生ぜしめるという意味で、私が面の色とよんでいるものである。」(25頁)

それぞれの定式について、ギブソンは解説しているが、それについてはふれなくておき、あと物質面の性質として上げられている7つの様態を項目だけ示しておこう。

1. 発光する面は、照明されている面と区別される。
2. 強く照明されている面と弱い照明下の面がある。
3. 容量のある面と、シートやフィルムの面は区別される。
4. 不透明な面と反透明な面。
5. 滑らかな面と粗い面、そして光沢あるものもないもの。
6. 等質な面と種々なものが凝集した面。
7. 堅い、中程度、柔らかい面。

### 4) 生活体にとって意味のある環境

環境について、これまで述べてきたことにもとづいて、ギブソンは、次に環境の意味について考察している。

「物理的実在の世界は意味のある事物から成り立っているものではないが、生態学的実在の世界は、私が述べようとしているように、深い意味をもつ事物から成っている。我々が知覚したものが物理学や数学の存在であったとすれば、意味はこれらの学問領域に付与されねばならないであろう。しかし、知覚するものが環境科学の存在であるならば、その意味は新たに見出され得るものである。」(35頁)

ギブソンの言う「意味」とは、動物にとっての意味であるが、これは主観的なものでなく、環境世界にもともと備わっていて、動物はこれ

を知覚によって見出すものとされている。このように考えると、幾何学で扱われていた平面や空間の概念に代わる新たな面の幾何学が必要になる。

「まず初めに、生活環境の配置と私がいっているものを記述する際に使用される用語と幾何学で用いられている用語の違いを考察しよう。面と媒質は生態学的用語であり、平面と空間はほとんど同じ意味をもつ幾何学用語であるが、両者の違いに注意しなければならない。平面は色をもたないが面には色がある。平面は透明で、抽象的なものであるが、面は一般的に不透明で、実体のあるものである。2つの平面の交叉による線は、2つの平らな面が接合してできる縁や隅と同じではない。私は生態学的用語を明確に定義しようと思う。以下に述べる用語法は、面の配置の理論、いふなれば知覚と行動の研究にふさわしい一種の応用幾何学の初めての試みである。」(35頁)

ギブソンは従来の抽象的幾何学に代わる面の幾何学を構成する基本的な用語の定義を行っているが、ここではそれらの用語だけを上げておこう。

地面、開けた環境、囲い、遊離対象、付着対象、部分的囲い、中空の対象、場所、シート、割れ目、棒、繊維、二面角、切断縁、境界、湾曲した凸面体、湾曲した凹面体、等々。

ギブソンが上げた面の幾何学のこれらの用語を見ただけでも、これらが意味にあふれている事がわかる。とりあえず、環境は動物に何を与えるか、というテーマでギブソンが、これらの用語について説明しているところから、地面がアフォードするいくつかの例を示しておこう。

環境は限られた空地でのみ移動をアフォードする。

路は移動を妨害する地形の特徴の間を、場所から場所へと歩行移動することをアフォードする。

移動を妨害するものは、障害物、一般の妨害物、水際、崖ぶち等である。

踏み段は下りていける場所で崖ぶちとは区別される。



斜面は地形の特徴の一つであり、平坦な地面との角度およびその肌理によって、歩行移動をアフォードしたり、しなかったりする。

だいたいこんな感じで、ギブソンは、面が動物に与える意味について次々と上げていっている。そのうえで、一観察者の環境とすべての観察者の環境が同一のものかどうか、という問題について考察している。

その際ギブソンは、各観察者の環境は、唯一のものである、という考え方を反駁することによって自説を展開している。この唯一のものとする考え方は、観察者が静止していると仮定した上のもので、現実には、動物や人間は常に移動している。だから、動物は同時に同じ場所に

居ることはできないが、どの個体もあらゆる場所に立つことができるわけだから、「生息地が持続する実体的な配置を有する限り、そこに生息している動物はすべて、等しくその場所を探索する機会をもっている。この意味で、環境は、一観察者を囲むと同じように、すべての観察者を取り囲んでいる」(46頁)とギブソンは述べている。

動物の知覚と行動という見地から環境についての科学を打ち立てようとするギブソンは、環境を個体を取り囲んでいるものと考え、それがすべての観察者を取り囲んでいることを示すことで、環境がもつ意味を動物が知覚し行動するという考え方の正当性を示そうとしている。

## 後記

ひきつづき心理学の本を読んでいます。前回について、ワロンの身体論と社会論を紹介してみました。社会形成力を情動に求めるワロンの見解は、「新しい思考」の一つの柱としての役割をはたせそうです。

次にギブソンにとりかかりました。魅力的だがなかなか納得しにくいギブソンの生態的光学ですが、ノートを書いていって、やっと飲み込めたような気がしています。ギブソンは、思惟抽象と事態抽象とのちがいがわかっていて、包囲光配列は事態抽象によって成立していることを見抜いていたのです。しかし、これをうまく記述することは出来なかったように思います。原稿は予定の半分くらい書いたのですが、今回はスペースの関係で、第1章だけ掲載します。

『新しい思考』を求めては、雑誌『唯物論研究』に投稿したものです。もともと投稿するつもりはなかったのですが、直前になって書きたくなりました。ここで述べた事を当面の理論研究の指針にするつもりです。

最後に一身上の事になりますが、99年頃から始まった社会運動の高揚に直面して、私は専従的な活動で生活するという方向を追求してきました。しかし、この目論見は成果を生みませんでした。色々原因はあるでしょうが、何よりも長期不況には勝てなかった、という実感をもっています。サポートセンター(準)が発足したこともあり、今年は自分自身の事業として、自費出版のサポートをしようと考えています。たまたま竹村さん達取材した『帰農の時代にさきがけて』(社会システム研究所発行)が出版できたこともあり、その延長で出版活動を始めます。また、研究所の設立は、ASSB誌を発刊するときからの念願でしたが、10年たった今も、どんな形であれ、社会運動のシンクタンクの形成に努力していきます。ASSBの刊行もその一環となるよう努力していきますので、変わらぬ支援をお願いします。会誌は、2004年3月までに6回発行します。会費は、従来通り、正会員一口10万円、賛助会員一口3万円、購読会員一口1万円です。なお、地域通貨では5,000円相当で購読できるようにします。

(資料)

## 第4次PC(政治・文化)講座のご案内

2003年2月 境 毅

### 第4次PC講座開講にあたって

1997年から開始されたPC講座は、都度独自のテーマを決めて実施してきました。今回はテーマを「時代の変化を知る」とし、いわゆる現状分析に取り組みます。

現代は、経済学の常識が通用しなくなっています。政府の官僚機関もどうしていいかわからず、不況からの脱出はなかなか実現しません。これは、現代が時代の変わり目であることとかかわっています。

旧い動きと新しい動きのせめぎ合いがなされていることで、社会や経済がどのように動いているかが見えなくなっているのです。どのようなせめぎ合いがあるのか、このことを知ることが現状分析の課題です。

この課題に対して、金融システムの分析から始め、多国籍企業の現状を明らかにして、産業構造と労働力構成の変化について解明します。

その上で、今日一般化している近代的社会意識諸形態としての価値観がどのように成立しているかを明らかにし、運動のせめぎ合いについて分析します。そして、最後に混乱する現代に切り込める視点を「新しい思考」というレベルで提示します。

### 第4次PC講座 実施要項

- 1) 期間は、1年間とし、6回の講座をもちます。
- 2) 期日は、2003年3月より奇数月の第2土曜日、午後2時~6時
- 3) 場所は、**お向い合わせ下エリ。**
- 4) 参加費 稼ぎのあるメンバー 年間 50,000円  
学生、フリーター 1回 5,000円 (LETSでの支払も可)  
サポートセンター、ニュースタート関係者 1回 1,000円 (LETSでの支払も可)



## 5) カリキュラム

### 基本テーマ： 時代の変化を知る 6講

#### ① 金融システム (2003/3/8)

現状分析を何から始めるか、と考えたとき、今日では金融システムの変化から論じることが適切である。というのも、金融システムはもともと架空資本の運動する場であるが、今日では、架空資本の運動が現実資本の運動を規制する、という逆転現象が起きているからだ。まず金融システムの変化とその現状を知ることからしか、現状分析は始まらない。

#### ② 多国籍企業 (2003/5/10)

架空資本の運動の次のポイントは多国籍企業である。中位の国家の国民総生産と肩を並べるまで巨大化した多国籍企業とは一体何なのか。そして多国籍企業の利害にもとづいてなされているグローバリゼーション、この事態を知ることなしに、世界の理解は進まない。

#### ③ 産業構造と労働力構成 (2003/7/12)

ここでやっと伝統的な分析が登場する。日本に限らず、世界という規模での分析を試みたいが、とりえずは日本のケースについて明らかにしたい。

#### ④ 価値観 (2003/9/13)

価値観の変化も著しい。科学的世界観で一元化されていた時代はつとに終わり、一人一価値観の世界に入っている。この変化を個人の自己神格化の過程として捉えかえしてみたい。

#### ⑤ 階級闘争と社会運動 (2003/11/8)

価値観の変化と対応しているが、階級闘争も含めた社会運動の変化も著しい。運動の目標が普遍的なものから個別的なものに転化し、かつ、具体的な課題の実現に関しては、国や自治体の関与が見られるようになっている。

#### ⑥ 「新しい思考」の提案 (2004/1/10)

時代の変化をふまえて、具体的な提言を行う際に、まず、思考方法の刷新について考えたい。その問題意識は、いったん中世の魔法がかかった世界から人間的に解放された近代的個人が、その後の資本家的生産の発達の過程で自己神格化を余儀なくされている、という現実に切り込める視点の確立である。

以上

2003年2月

PC講座世話人会

連絡先 / 大原正義

〒607-8192 京都市山科区大宅御供田町3 イーグルコート大宅202

E-mail [kyw04500@nifty.ne.jp](mailto:kyw04500@nifty.ne.jp)

URL <http://homepage1.nifty.com/office-ebara/>